「最期の食事」

受賞者：神田 直孝さん

医師であれ看護師であれ、医療従事者も患者と同じ生活を営む「人」であることに変わりはないが、病院の中では〝日常〟という感性が鈍くなりがちである。患者は病気を抱えている「人」であり、生活を営んでいた「人」という視点で〝日常〟の大切さを考えるきっかけとなった15年前の出会いがある。

Aさんは70代の男性で、脳梗塞や認知症を患い入院していた。かつて大手企業で幹部を務め、お子さんを3人も育て上げたことを誇らしく話されており、奥様も毎日面会に訪れるような仲むつまじい家族だ。Aさんは食事の時間を何よりも楽しみにしていたが、疾患により嚥下機能が徐々に低下し、ある朝窒息しかけるほどの誤嚥をして、主治医から「次に誤嚥性肺炎を起こせば、助かる見込みはないから非経口摂取の経管栄養に切り替えよう」と指示があった。我々看護チームはAさんにとって大好きな食事を奪ってしまうことに複雑な想いがあり、Aさんの人生最期の食事が、今日の朝食であったと告げるのは残酷ではないかと胸が痛んだ。

「本人に告げた上であと1食食べてもらいたい。看護師としての役割は、その1食を安全に提供することではないか」

私たちの相談に主治医は強い拒否を示したが、1時間以上意見交換し、本人とご家族の意思であればと許可をしてくれた。連絡を受けて来院したご家族と共にAさんは医師からの説明を聞き、非経口摂取にすることを同意された。

奥様はAさんの大好きだった煮物などをテーブルに置ききれないほど沢山作ってきて、駆け付けた3人のお子さんと一緒に食卓を囲んだ。Aさんはご家族の思い出話を聞きながら「美味しい。美味しいよ」と小さな口を精いっぱい開けて手料理を召し上がり、涙を流していた。昼時の病棟のホールで温かい日差しの中、何十年ぶりかのだんらんがそこにはあった。

「人」の人生に関わる看護師として〝日常〟を忘れず、患者と関わることの大切さと尊さを教えてもらった出来事だった。